

① 鬼の岩屋（円通寺新宮跡）



新宮は修験道山岳寺院だった円通寺の伽藍（がらん）の一つで、神宮橋から南に 200m ほどの位置にある岩窟内に社殿が造られました。

その構造と大きさについては、古書によると、岩窟に柱を立て岩を直に天井として正面が三間、洞窟内部に向かって七間とあります。また、古絵図には、正面に妻と見せた懸造の建築が前方の谷へと突出していて、上から滝が落ちてくる情景が描かれています。

残念ながら、現在は社殿もなく、滝も大雨の降った後でしか見る事ができません。

また、洞窟内から外を見ると、富士山の形に切り取られた風景を見る事ができます。（現在は立ち入り禁止）

「大月桃太郎伝説」では、この新宮跡を鬼が棲んでいた「鬼の岩屋」としています。

② 鬼の血（子神神社）



808（大同 3）年 9 月の創建と伝えられています。

岩殿山円通寺（現在廃寺）の鬼門（北東（丑寅））に当たるため、国津神の首領でありネズミを神の使いとする大己貴命（大国主命）を御祭神として祀ったので子神社と名付けられました。

明治維新までは岩殿山七社権現が岩殿村の産土神（うぶすながみ）でしたが、円通寺の廃寺によって明治以降は岩殿村の産土神氏神として崇敬（すうけい）を集めています。（山梨県神社庁 HP）

「大月桃太郎伝説」では、境内の土の色が赤いのは、赤鬼が、桃太郎との戦いで逃げ出す時に隣の徳巖山に足をかけようとしたら股が裂け、その時に流した血が今も赤土となって残っているからだとしています。

③ 鬼の盃（手洗い石）



賑岡公民館岩殿分館の市道を挟んだ西側の空き地に 150cm×155cm×75cm ほどの大きさを中央が丸くくぼんだ錐体の石があります。

石の側面には「奉納 天保十一年庚子年三月日 若者」と刻まれています。

ここが、明治維新までは円通寺の観音堂や三重塔、鐘楼があった場所であることや、その形状や刻字から、この石が「手洗石」であることがわかります。

「大月桃太郎伝説」では、この石を岩殿山に住む鬼が使った「鬼の盃」としています。

④ 桃太郎地蔵（岩船地蔵）



「鬼の盃」の西側すぐ近くの林の前に石の船に乗った地蔵菩薩像が立っています。

石の船には、年号はなく「施主、葛野村、強瀬村、下和田村、岩殿村」の文字が刻まれているのがようやく判読できます。

その姿と刻字から、「廻り地蔵」として有名な「岩船地

蔵」だと考えられています。

「廻り地蔵」の習俗は全国的にみられ、一つの村なかを家ごとに送るものや広い地域を村単位で巡るものもありました。

その中でも、「岩船地蔵」は、江戸時代中期の享保 4（1719）年頃、下野国岩船山高勝寺（現 栃木県栃木市岩舟町）を出発し、関東や中部の各地を村送りされ、一時期大きな信仰を獲得しましたが、その由来や巡行の経路についてはまだ明らかではありません。

岩船地蔵が送られてきた村では、それを迎えて、華やかな服装をし、賑やかに囃し立て、念仏をし、自村だけでなく、近隣の村々まで巡りました。

そしてそれを受け取った村でも同様に行い、順次村送りされて進みました。

この「岩船地蔵」は、その記念として造られ、祀られたものと思われます。

「大月桃太郎伝説」では、「岩船地蔵」が左手に持つ宝珠を「桃」に見立て、「桃太郎地蔵」とよんでいます。

⑤ 鬼の杖



大月市営石動団地の西にある畑の一角に、高さ 125cm、幅 42cm、厚さ 19cm の花崗閃緑岩でできた直方体の石が斜めに突き刺さるような形で立っています。

斜めに傾くその先には岩殿山があることから、岩殿山に住む鬼が投げた石杖であるとの話がいく通りも昔から伝わっています。

あわせて、この石のある場所の小字（こあざ）である「石動」も、鬼の石杖が突き刺さった時に起きた地震によることからつけられたものとしています。

諸説ある中で、「大月桃太郎伝説」では、犬目で犬を、鳥沢で鳥、猿橋で猿を家来にした桃太郎が、猿橋から岩殿山にいる鬼に向かって「これから退治に行くぞ」と呼びかけたところ、怒った鬼が左手に持っていた石の杖を猿橋の方向へ投げつけたものの、左手だったために猿橋まで届かず、途中の畑に落ちてしまったとしています。

⑥ 桃倉橋（百蔵橋）

葛野川にかかる橋で、中央付近から上流を眺めると、

- ・赤鬼が住んでいた岩殿山
- ・逃げるときに跨いだ徳巖山
- ・桃が転げ落ちた百蔵山（桃倉山）
- ・桃が流れ下った葛野川

など、「大月桃太郎伝説」の舞台が一望できます。

⑦ 猿橋



猿橋は、橋脚をもたない桔橋（はねばし）という特異な構造をもつ橋です。橋の長さは約 31m で、橋の幅は 3.3m、橋板から水面までは約 31m あります。

猿橋の南詰、橋に向かって右側にある大きな石は、『猿橋記』という宝暦 5（1755）年に造られた案内碑です。

この石に、猿橋は、「錦帯橋」、「木曽の棧（かけはし）」とともに日本の三奇橋の一つであることや、推古天皇の時代、猿王が藤蔓を伝って断崖を渉るのを見て、両岸から巨木を倒して重ね、谷にかける構造を思いついたことなどが刻まれています。

現在の猿橋は、嘉永 4（1851）年に架替を行った時の工事報告書である出来形帳（できがたちょう）を参考にして、江戸時代の猿橋を復元したものです。

明治 33（1900）年の架替から、交通量の増加や運搬車両の通行のため、猿橋は幅を大きく拡げます。

しかし、昭和 9（1934）年新猿橋の架橋によって国道としての使命は終わります。以後、歩行者用として、また国の名勝（昭和 7 年）として現在でも残されています。

⑧ 大月市郷土資料館

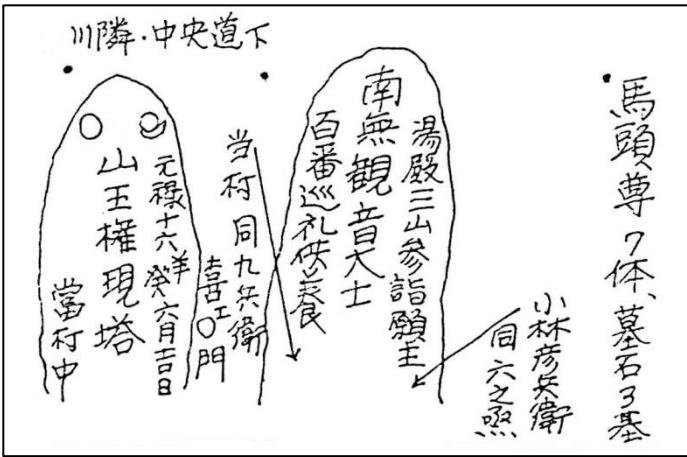
大月市の歴史を学習することができる施設です。猿橋を見学する前に、した後にぜひともご来館ください。

2019年11月30日



題目塔

「南無妙法蓮華經」と記されたもので、ヒゲ題目と呼ばれる文字の先にハネを多用する独特な文字で記されているのが特徴です。



供養塔

供養の対象に心を込めて感謝するとともに、その冥福を祈る証として建立されました。

山形県の三山（羽黒山、月山、湯殿山）や観音霊場を巡礼した記念として建立される三山供養塔や百番供養塔、「南無阿弥陀仏」を百万回唱えた証として建立される百万遍供養塔などがあります。

三界万霊塔

万霊塔に生命のあるすべてのものの霊を宿らせて、この塔を回向することにより万霊を供養するという目的で建立されたものです。

三界とは、欲界、色界、無色界や心界、衆生界、法界など諸説ありますが、いずれにしても「すべての世界」を指しています。

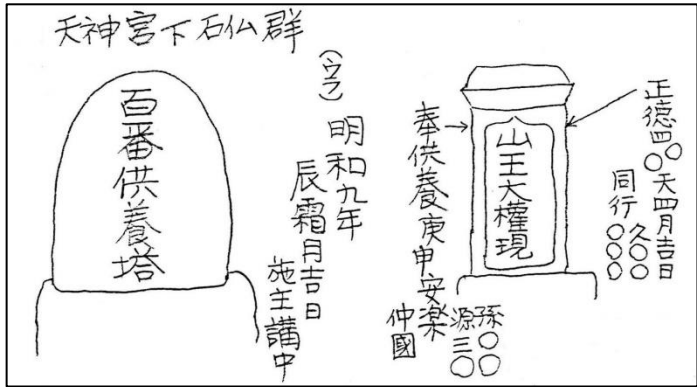
山王権現

山王信仰とは、最澄が比叡山に天台宗を開いた際に、唐の天台山の守護神「山王元弼真君（さんのうげんひつしんくん）」にちなみ、既に比叡山の守護神として鎮座されていた日吉大神を「山王権現」と称したことから始まる神仏習合の信仰です。猿を神の使者とみる信仰があり、山王祭・日吉祭などの祭礼も、近世までは陰暦四月の中の申（さる）の日に行なわれました。（日吉神社 HP より）

※参考

『大月市の石造物』『大月市の石造物 Ⅱ』
『岩殿山の総合研究』
『甲斐国志』

石仏群—代表的なもの—



馬頭観音

石仏では確認できませんが、表情は忿怒の相をしていて、頭には馬頭を載せているのが特徴です。馬頭から、畜生道の教主とされることが多く、特に当時の農耕や交通に用いられた馬への無病無事故の祈願や馬の供養として建立されました。

六地藏

「六」とは、六道のことで、地獄、畜生、餓鬼、修羅、人、天という世界を輪廻によって転生するという思想からきています。六地藏は六道にいる衆生を救済すると信じられていました。

庚申塔

中国の道教にある「人の身体には三尸という虫がいて、庚申の日（二か月に一度）に天帝へ、その人の罪を報告する」という思想から生まれた信仰です。三尸は就寝中に抜け出すため、人々は庚申の夜に集まり、おこもりをして夜明けを待ちました。

この庚申会で祀られたのが青面金剛です。

月待塔

月待信仰は、十五夜、十七夜、二十三夜など、特定の月齢の月を拝んで豊作や幸福を授かろうとする行事です。夜に人々が集まり、月の出を待ちながら飲食を共にしていました。

名号塔

名号塔は、神仏の名号を記した石塔の総称です。「南無阿弥陀仏」の六文字のものが多く、「阿弥陀仏」、「南無不可思議光如来」など四文字、九文字のものもあります。